

## 第一部

## Ⅳ 神の契約の豊かな多様性と進展

### エペソ1:4～14

#### はじめに

今回は神の永遠の贖いのご計画について、契約と贖いについて、エペソ人への手紙1章から歴史をさかのぼってみる。そして、創造主がイスラエルに与えた契約の多様性とその発展についてである。それは、冒頭のエペソ人への手紙1章4～5節に記されている。

また、同じ10～11節にあるように、「みこころによる計画のまま」であった。それは、7節にあるように「血による贖い、背きの罪の赦し」であり、贖いの目的は「私たちが贖われて神のものとされ、神の栄光がほめたたえられるため」(1:14節)であった。

#### 1. 創造における神と人との関係(創造の契約)

(1) **(わざの契約)** ----- 墮落前の人と創造主との関係を表す言葉である。罪のない完全な人間であったアダムに対して神が結ばれた契約である。アダムが正しい「わざ」を行えば、神から約束された祝福を受けるということで、完全な人間であるからこそ、かわかること自体が恵みに満ちたものであった。そこで、これを**〈創造の契約〉**と呼ぶようになった。

(2) **(恵みの契約)** ----- 墮落の後の人と創造主との関係を指す言葉である。墮落によって人は救いに値する「わざ」を行えなくなったので、これ以後おもに神の恵みの支配する時代になったと考えられてきた。神に反逆して罪びととなった不完全な人間が、完全な行いで救われることは不可能となった。それゆえ神は一方的な恵みによって罪びとを救う契約を与えられた。しかし、この呼び名にも課題が残る。つまり、めぐみの契約においてわざが働く余地がないかのような誤解を与えることである。そこで、これを**〈あがないの契約〉**と呼ぶようになった。**〈創造の契約〉**は天地創造において、神が人と結ばれた結びつきを表し、**〈あがないの契約〉**は、墮落後に、神が人とかわかろうとして与えたさまざまな契約を包括するものである。

#### 2. あがないの契約の歴史と進展

ここで旧約聖書と新約聖書の関係について再び確認しておく必要を延べる。それは、旧約も恵みの契約であって新約から恵みの契約が始まるのではないということである。それは誤解であり、旧・新約共に「あがないの契約」であり、先に述べたように「めぐみの契約」に含まれている。そこで、以下のように、多様な契約の概略を申し上げる。

##### (1) アダム契約(はじまりの契約)

創世記3章14～19節には、アダムに与えられたあがないの契約が記されている。特に15節は「原福音」と名付けられている。最初の福音である。

① サタンへのことば (創世記 3 : 14~15)

★これはサタンへの呪い、女の子孫への祝福である。

蛇が神の呪いを受け、神の敵意が人とサタンの間に置かれた。

神に敵対するものはサタンである。使徒パウロは神の究極の敵を名指して叫ぶ。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです」(エペソ 6 : 12)。

★宇宙大のドラマの幕は、ここに火ぶたを切って降ろされたのである。罪ある人間のあがないの歴史は、人と被造世界全体を巻き込んで展開する。人の世界のみならず、動物界にも、自然界全体にも墮落の影響は及ぶのである。(ローマ 8 : 19~22)。

★あがないは人間中心にとどまることではない。偉大な創造主としての神の栄光に攻撃がなされたのであり、神の栄光の御業が著しく傷つけられたのである。もはや。贖いは人のためのみならず、神の栄光のために、神ご自身の側から、神ご自身によって企てられたことは明白である。「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない」(イザヤ 43:25)。

★使徒パウロは、贖いの目的についてローマの教会に次のように書き送った。

「-----神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。」(ローマ 3:23~26)。

★この 15 節にあるもう一つの代名詞で「彼」と呼ばれる人物が誰なのかを聞きたい。

「彼」とは女の子孫で、その代表として一人の頭があらわれ、サタンと一対一の戦いをすることが預言されている。「彼」すなわち「その一人の英雄」こそがキリストである。「神は、『子孫たちに』と言って多数を指すことなく、一人を指して『あなたの子孫に』と言っておられます。それはキリストのことです」(ガラテヤ 3 : 15~16)。

② 女へのことば (創世記 3 : 16)

★ここでの「女」とは、エバ個人というより、女性全体を指しており、人類全体と考えることも可能である。墮落した女から生み出される子孫であるが、神はめぐみによって、女の特定制の子孫たちのこころの内にサタンに対する敵意を置かれたのである (15 節)。この子孫たちこそが、女の「子孫」とされる人々である。

★女が子を産むことは大きな祝福であり、生まれてくる子孫は神のあがないの計画に加わる役割を与えられている。

③ 人へのことば (創世記 3 : 17~19)

★ここにも呪いと祝福がある。祝福は、人が食を得る事実に見られる。命を保つための欠かせない糧は、神から与えられる。この恵みを当然のことであるかのように見落としてはならない。

#### ④ 贖いの契約の印 （創世記 3 : 20～21）

「人は妻の名をエバと呼んだ。彼女が、生きるものすべての母だからであった。神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。」

女の子孫に贖いの契約の印として、神が一方的に皮の衣を与えた。皮の衣は、贖いの生け贄として動物の血が流された事を表す。この衣服はアダムとエバの手によらず、神が供えられたのである。このことによって十字架の贖いの予表と見るか見ないかは、解釈の分かれるところではあるが、私は素直に 3 章 15 節の原福音の具体的予表として受け止める。罪からの救済の計画をなさる神は、契約と贖いを備えられた方である。罪の裁きをなさるお方は、救いの道を備えるお方であると信じるからである。

#### むすび

アダム契約はサタンへの呪いと女の子孫の贖いについて、詳細に述べてきたことを味わっていただけたと思う。

そこで、今回のむすびをどのように締めくくるのか、少し飛躍するようであるが、「めぐみの契約」と「アダム契約」に登場した、イエス・キリストの贖いの御業を申し上げて終わることにする。それは、エペソ人への手紙 1 章 9～10 節のみことばにふさわしいからである。

「みこころの奥義-----とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」

以下は、主イエスが最後の晩餐で弟子たちに述べられた命令である。

「これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、私の契約の血です。」

（マタイ 26 : 28）

十字架は、古い契約の呪いを引き受けつつ、新しい罪の赦しの祝福の契約を結ぶものであった。